

幕末の薩摩藩の財源について

地歴・公民科 池田真里

1 はじめに

4月に古仁屋高校に赴任し、奄美大島の自然・風土に接し、サトウキビ栽培と製糖業が奄美大島の産業に占める割合の大きさをあらためて感じるようになった。サトウキビは幕末の薩摩藩の財政を支えていたことは周知の事実であるが、これについて調べていくうちに、他にも薩摩藩の財政を支えていた事業を知り、とくに開国後に焦点をあて、大きな財源となったといわれている事業について今回わかりえた範囲でまとめてみた。

また、幕末の薩摩藩の財源のひとつであった琉球口貿易（琉球から中国への朝貢貿易）については島津斉彬が藩主に就任したころの嘉永年間には、行き詰まっていたとのこと（徳永和喜『偽金づくりと明治維新』）から今回は取り上げなかった。

2 砂糖について

調所広郷による天保期の改革において、奄美の砂糖は惣買入れ制により島民は一切売買ができなくなった。年貢以外の残りの黒砂糖も全て藩が相場より安い値段で日用品と交換するようにしたのである。また、黒砂糖に品質を向上させたので、一斤あたりの価格が上昇した。天保の改革以前の砂糖の売上高は年13、4万両であったが、改革後の天保元年（1830年）から10年までの売上高は平均で235,000両に増えている。

元治元年（1864年）の「大坂蔵屋敷収支決算書」（『鹿児島県史料・玉里島津家史料四』）には全収入1,000,049両余りのうち砂糖に関連している収入は427,122両を占めている。この砂糖には琉球産も含まれているが、突出した収入であったことはいえる。翌年の3月には大坂留守居が新砂糖船が到着しないため、資金繰りが苦しくなり、借り入れをしなければならぬということを藩の財政担当の側用人に伝えている。

また、イギリス人技師2名を雇い、慶応元年（1865年）に奄美大島の4カ所に西洋式の製糖工場の建設をはじめている。これは価格の高い白砂糖をつくるためであり、奄美の製糖業が重視されていたことをしめすものであるといえる。

3 偽金づくりについて

偽金づくりのきっかけは、膨大な資金を必要とした集成館事業と欧米列強に対抗しうる軍事力の増強のため島津斉彬が経済的補てんを考えたことにはじまる。そのために琉球国救済の資金として限定的な貨幣鑄造の許可を申請したのである。斉彬は幕府から許可されることを前提として事前に準備を始めており、天保通宝で私鑄を試みていた。安政4年（1857年）夏から5年7月（斉彬逝去）まで1日に500枚程度を鑄造していたが、斉彬逝去後は断絶した。

その後、島津久光の時代になり、薩摩藩に仕官した安田轍蔵が自ら発明した木綿（桑・黄楊などの皮から繊維をとったもの）の製造のための買え付けの決済手段として琉球通宝の鑄造を幕閣に根回し、藩が許可申請をし、幕府の許可が文久2年8月におりた。その通用は島内に限るとされていた。藩としては、内外の不安な政治情勢の中、文久2年の久光の上洛に莫大な経費を必要としており、余裕の財源はなく、琉球通宝の鑄造が必要だと考えていた。

この鑄銭は安田が請け負う契約がなされ、安田が江戸から職人を連れて鹿児島にやってきたが、安田が幕府の隠密であるとの疑いがかけられ、屋久島に行くことになり、鑄銭事業は藩の直営となった。

文久2年（1862年）10月11日に天保通宝で試鑄が開始され、12月22日に鑄銭所が開業し、本格的に鑄造が開始された。この動きと並行して、10月21日には大久保一蔵（利通）が天保通宝を鑄造する意志があることを琉球通宝鑄銭局総裁に告げている。11月1日には天保通宝鑄造のための母銭の文字を書く人物が決まり、文久3年2月27日には、母銭の彫刻者を決定している。

鑄造高は開業から文久3年4月29日の間に5,030,308枚（金高78,588両2分2朱）、開業から文久3年5月17日ごろには10万両となっている。1日当たりの鑄造高も開業当初は1万前後だったのが、文久3年5月後半には10万台から11万台となっている。

鑄銭所は文久3年7月の薩英戦争で焼失し、戦後別の場所で再開した。9月8日から12月28日の鑄造高は銭高1,718,539貫342文（金高190,948両3分と590文）となっている。そして、元治元年の1年間では4,259,737貫500文（金高473,304両2朱と372文）が鑄造され、経費を差し引いた利益は3,596,243貫248文（金高399,582両2歩2朱と184文）と記録されている。

また、二分金の贋金も慶応元年には鑄造がされていた。もともと偽銀貨の計画が文久2年末からはじまっており、これが途中で金銀贋造となっていることから偽金貨も計画されていた。二分金を中心とする贋金づくりは薩摩藩だけではなく、会津藩・名古屋藩・安芸藩などの多くの藩が行っていたことであり、幕府勢力の衰退によって取り締まり能力がなくなったことを見越して、軍事費の増大に対する財政不足から贋金づくりが行われたと考えられる。

偽金づくりについてすべてが解明されているわけではないが、幕末期において、薩摩藩では大きな財源の一つであったといえる。

4 薩摩藩の外国との交易について

「大坂ニ於ケル諸品買入高」「長崎貿易利潤」「長崎貿易収支計算ニ付伊地知壯之丞報告書」（3点とも『鹿児島県史料・玉里島津家史料二』）をみると、元治元年（1864年）の大坂における買入高110,569両余のうち

綿 20,696本 金 91,990両（83.2%）

宇治茶 2,599 箱 金 17,082 両 (15.4%)

が、主で他に昆布、木綿形付を購入している。

さらに、買取についてみると綿は英人カラハ（グラバー）とレンボ、清人沈篤斎の 3 人が、宇治茶などは異人が買い取っている。最終的な利潤は 20,899 両と報告している。

以上のことから、薩摩藩の長崎貿易が綿を中心に行われ、取引相手が外国人であったということから、外国との取引を前提に綿を買い付けていたといえる。

なぜ、交易品の中心が綿であったのかというと、これにはアメリカの南北戦争が関係している。戦争のためアメリカ南部からの綿の輸出が途絶え、イギリス・フランスの紡績業界は日本・中国産の綿を購入したため、綿が高値で売れたのである。元治元年当時、大坂では繰綿（種をとった、綿繰り車を通した綿）100 斤が 4、5 両だったが、外国人に販売すれば 17 両から 18 両になったため、薩摩藩の御用商人であった浜崎太平次は大坂で繰綿を約 36,000 両も買占めていたようである。当然、薩摩もこれに目をつけ、大坂をはじめ西日本各地で購入し、外国人商人に売っていたのである。

そのため、元治元年 2 月には浜崎太平次の船が、関門海峡で襲撃を受けるという事件が起きている。この船は堺で買い込んだ膨大な綿・油その他の品物を長崎まで運んでいた。その荷物は長崎で外国との取引をするためであると船長が白状したため船長が斬殺され、大坂で首をさらされた。同じ 2 月には京都の三条大橋で薩摩藩が綿貿易をしていることに対して木綿は「火攻戦争の楯」であり、敵国に兵器を与えるとして非難の札が貼られている。攘夷派からすると、薩摩藩が行っている行為は許し難いものであったのである。

かつ、生糸の取引もおこなっており、慶応元年の「和蘭コンシュル『ボードエン』ヨリノ共同営業規約及『ゴロウル』商社との共同営業規約二通・林徳左衛門等ノ伺書三通のうちの三通目」（『鹿児島県史料・玉里島津家史料四』）のなかに生糸の買い集め方が記載されており、新糸を 6 月頃に買い集め、7 月の盆後に京・摂津や横浜に運送するけれども、国内や中国の値段をよく調べてから買い入れた方がよいことや洋銀が高値で取引されているので、一步銀で茶と生糸を買い入れると利益が上がることや中国の上海では洋銀の価格が上下するため注意が必要なことなどがあげられている。また、慶応元年 6 月 26 日には「長崎ニ於テ『ゴロウル』商社ト薩州重役トノ契約」（『鹿児島県史料・玉里島津家史料四』）が結ばれ、ドルラル 3 万枚を生糸購入のためゴロウル商社より受取り、（中略）取引が成立した時は利損を折半し、上海またはその他の場所で売りさばくために輸送するという事になっている。これらのことから、生糸の取引は上海市場も視野に入れたものではないかと推察される。

さらに、薩摩藩は文久 2 年から慶応 3 年までの間に大量の武器・艦船を購入している。文久 2 年には薩摩藩士の五代友厚が 2 回上海に渡っており、上海マーケットの調査、蒸気船の購入、ライフル銃 1 万丁の一括購入を行っている。武器を新しく更新した時には、古い武器を幕臣や他藩に売却をしたり、薩摩藩が発注したと思われる汽船がのちに肥後藩の所有になったように、武器・艦船の転売による利益もあった。

5 最後に

甚だ簡単に調べただけではあるが、幕末の薩摩藩はお金になる事業をいくつもおこない、多くの資金を得ようとしていたのではないかを思われる。ひとつの産業・事業だけに頼れる状態ではなかったと思われる。また、ここにあげた産業・事業がひとつ抜けただけでも資金繰りに困る状態であったと考えられる。

薩摩藩の財政を支えた事業として琉球口での貿易を思い浮かべるが、

この文章はコラムのように気楽に読んでいただけたらと思い書いたので、本来なら史料の本文を載せるべきであるところを省略した。史料をご覧になりたい方は参考文献にも掲載されているので、参考にされてください。

《参考文献》

先田光演 『奄美諸島の砂糖政策と討幕資金』 南方新社 (2012年)

大江修造 『明治維新のカギは奄美の砂糖にあり』 アスキー新書 (2010年)

徳永和喜 『偽金づくりと明治維新』 新人物往来社 (2010年)

原口泉 『世界危機をチャンスに変えた幕末維新の知恵』 PHP新書 (2009年)

芳即正 『鹿児島史話』 高城書房 (2006年)